

た 他人の評価を真に受けない

まちづくりでは、現場に入っただけでいろいろな方の話を聞くことが多い。住民の方々の地域に対する思いや、課題意識を聞き出したり、場合によっては地域課題に関心のある方との出会いの機会を求めて話を聞く。時間が許す限りできるだけ多くの方の話を聞きたいのだが、初めてのまちではとりあえず町内会や商店街などの地域組織の代表の方に話を聞くことも多いし、行政の担当者に地域の声はどうかと聞くこともある。

それらの方々と親しくなると、「この人に来てみたら」といろいろな方を紹介され、話を伺う輪が広がってくる。そんな時に「あの人に話を聞いてダメだよ」とアドバイスをいただくことがある。何かとうるさく意見を言うとか、協調性がないというようなことだ。複数の方からそういうアドバイスをいただくとなんとなく「要注意人物」的なレッテルが貼られていく。逆に「あの人にはぜひ会った方が良い」というアドバイスをいただくことがある。まちのことに関心が高くて、いろいろな活動もされているという。こちらは「好人物」としての印象が強く残る。

実際にお会いしてみるとなるほどと思うのだが、必ずしも全てがそうだというわけではない。人に対する評価は、評価をする人の意識フィルターを通ったもので絶対的評価では無い。課題が山積しているのにもかかわらず課題に向けた動きが一向に起きない地域では、同調性を重視しそれに反する発言や行動を否定的に受け止めていることがある。そうなると「要注意人物」が場合によっては「変革者」になる可能性があることになる。また「好人物」はまわりから一目置かれるリーダー的存在として長年にわたって地域活動をつとめてこられ、それを回すだけで手一杯で新たな取組には消極的な場合もある。また地域のことを熟知していると自認するうちに、地域の新たな可能性に目を向けることが難しくなっている場合もある。

行政の担当者も客観的な評価とは異なり行政にとってどうなのかというフィルターがかかっている場合がある。いずれにしても、まちづくりプランナーとしては「他人の評価を真に受けない」一歩引いた視点で多くの人の話に耳を傾け、地域の課題意識や課題に向き合う姿勢を把握していく努力が必要になる。